

田野町文化財調査報告書第8集

あ　い　こ　が　た　に

# 合子ヶ谷遺跡

田野乗馬苑建設に伴う発掘調査報告

1989

宮崎県宮崎郡田野町教育委員会

## 例　　言

1. 本書は、田野町船ヶ山地区の「田野乗馬苑」建設に伴い、昭和63年度に実施した合子ヶ谷遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、田野町教育委員会が主体となり、調査事務を社会教育課主任主事後藤哲夫が、調査を同主事補森田浩史が担当した。
3. 本書に掲載した挿図は、室内作業員及び森田が作成した。
4. 本書の写真図版は森田が撮影した。
5. 本書の編集・執筆は森田が行った。
6. 本書に用いた方位は磁北、標高は絶対海拔高である。
7. 出土遺物は、田野町教育委員会で保管している。

## 本文目次

はじめに .....	1
調査の結果 .....	1
1. 調査に至る経緯 .....	1
2. 調査区の設定 .....	3
3. 遺構と遺物 .....	4
4. おわりに .....	5

## 図版目次

図版 1	調査区遺構・攪乱土坑等検出状況 トレンチ全景
図版 2	S K 0 1 検出状況 S K 0 2 土層断面

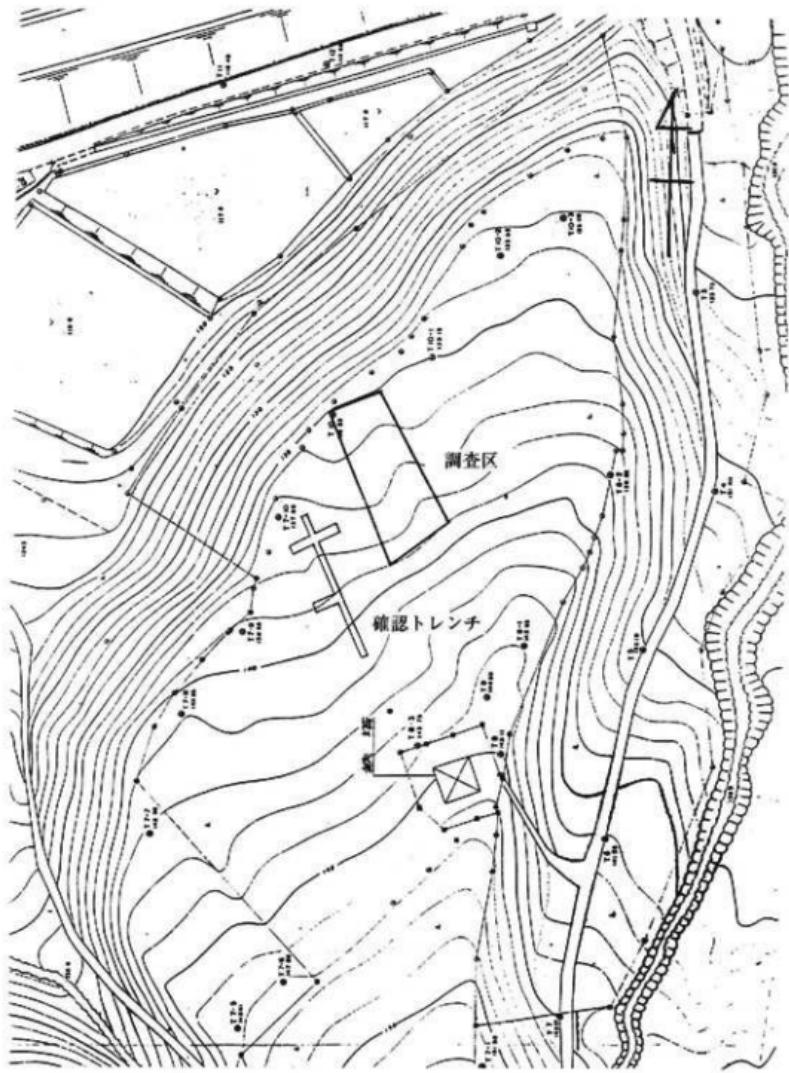
## はじめに

### 1. 調査に至る経緯

田野町では、從来から実施されている県営農地保全整備事業に加え、企業誘致、リゾート構想に伴う開発行為が盛んに行われつつある。田野町教育委員会では、昭和63年10月1日付で宮崎リゾート株式会社から、田野乗馬苑建設予定地の埋蔵文化財の有無についての照会があり、同月に県文化課の協力を得て、分布調査を行った。その結果、平安時代の土器が散布していることを確認し、遺跡であると判断した。さらに当初から削平が予定されていた部分について遺跡の範囲を確認するため、11月7日～8日にかけて、試掘調査を実施し、およそその範囲を確定した。その後、宮崎リゾート株式会社、町企画商工課、町教育委員会の3者間で保存について協議を行ったが、工事対応による現状保存が困難であるため、記録保存のための発掘調査を実施することになった。また、調査範囲以外の建設予定地についても、盛土で保存することを確認した。発掘調査は昭和63年12月5日から開始し、同年12月20日までに現地における作業を終了した。調査を実施するにあたり、[REDACTED]、並びに関係各位には多大なるご理解とご協力を賜わった。ここに記して感謝の意を申し上げます。



第1図 遺跡位置図

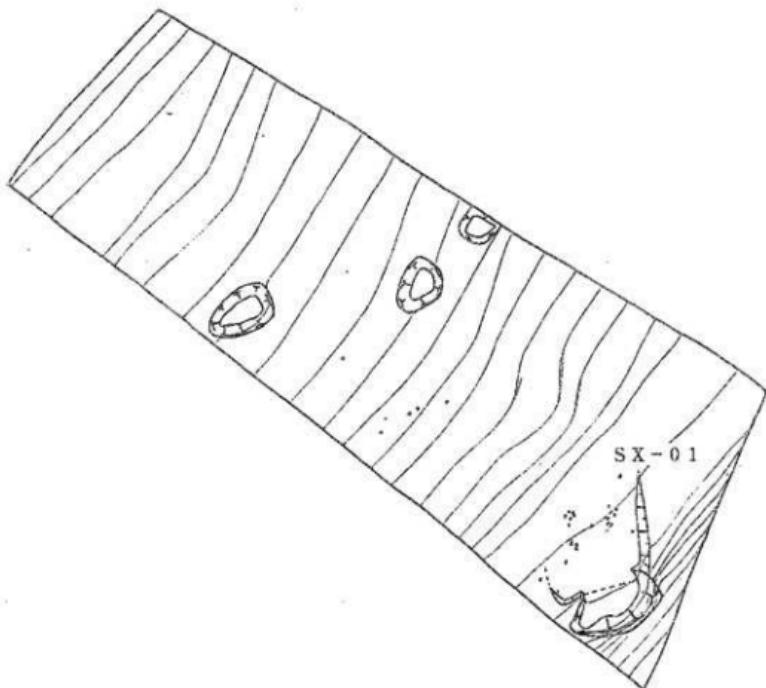


第2図 調査区周辺地形図

## 調査の結果

### 1. 調査区の設定

合子ヶ谷遺跡は、荒平山の麓に形成された小規模な丘陵上に位置し、標高約144mから北側先端約135mへと、比較的急な斜面を呈す。発掘調査は、事前におこなった分布調査と試掘調査の結果をもとに、遺物が集中して見られた部分について面的調査を、他の部分についてはトレンチによる確認調査を実施した。調査面積は全体で約400m<sup>2</sup>に至った。



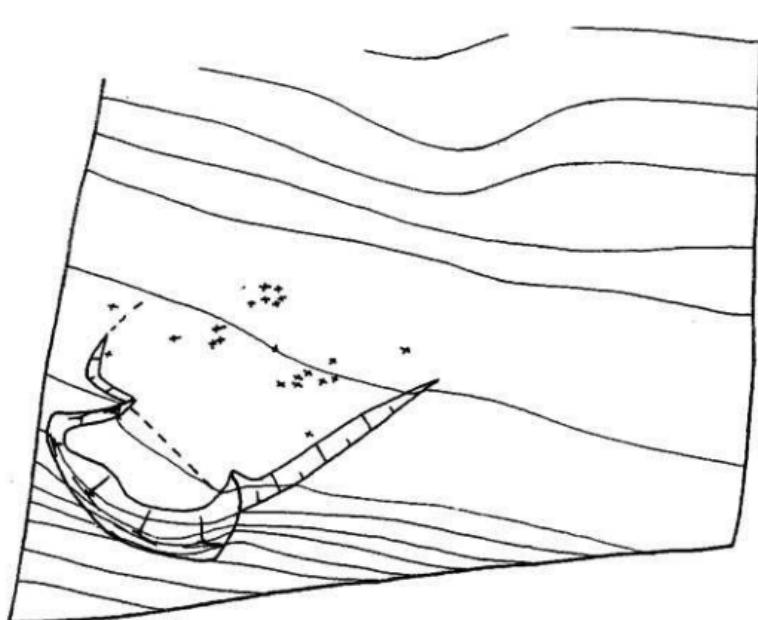
第3図 調査区概要図 S=1/400

## 2. 遺構と遺物

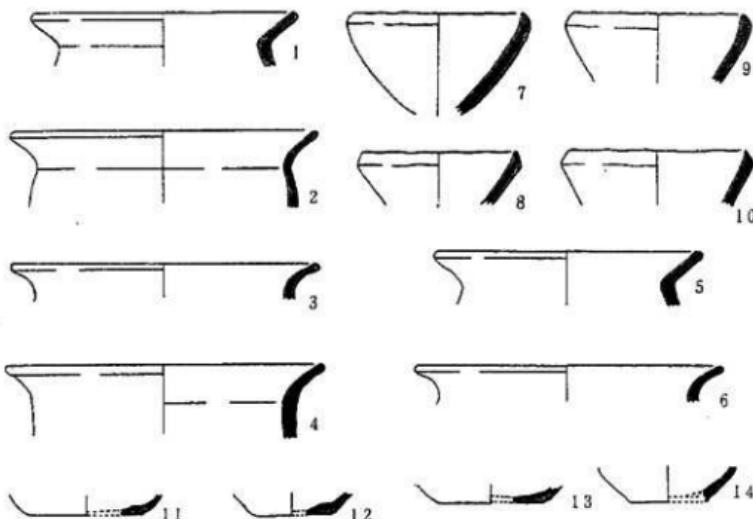
発掘調査は表上を除去した後、遺物包含層である褐色土層を精査し、その下層である二次赤ホヤ層上面において遺構検出をおこなった。

遺構はSK01が見られたのみで、他は近現代の擾乱であった。SK01は最長確認幅約4.4mで最深部45cmを計り、現状から長方形の形状が想定される。時期は出土遺物から平安時代のものとみられる。

遺物は遺構と包含層及び表土内から平安時代の土師器が出土した。(1・2・9・10)は遺構、(5~8・11~14)は包含層、(3・4)は表土内からの出土である。土師器には壺、杯、布目痕土器がある。(1~6)は壺である。内外面に荒いナデのち口縁部をていねいなナデにより仕上げる。形状は頸部の稜線をシャープにつくるもの(1・5)と、やや鈍いもの(2・3・4・6)がある。(7~10)は布痕土器である。口縁部はソギオトシ、内面に布目の痕跡が見られる。外面はいちじるしく風化しているが全体的に作りは粗雑である。(11~14)は杯である。いずれも底部のみで、口縁部の残存するものはみられなかつた。底部はヘラ切りの痕跡を残す。



第4図 SK01検出状況 S=1/200



第5図 遺物実測図 S=1/4

### 3. おわりに

調査の結果、合子ヶ谷遺跡は平安時代に営まれた遺跡であることがわかった。遺跡の性格は不明といわざるを得ないが、遺物の出土量からみて、きわめて短期間に営まれたものと想定される。町内の同時代遺跡については芳ヶ迫遺跡等で少量出土しているほか、現在のところ調査はされていないが布痕土器が各地で表採されており、今後の発掘調査等で徐々に明らかにされていくであろう。

この遺跡の発見を契機に、傾斜地等の分布調査や試掘調査の実施にあたっては新たな認識で取り組む必要があると考えるものである。



